

# GOD EATER DESTINY

セルシオン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

地球は、あらゆるものを捕喰する細胞「オラクル細胞」から形成される異形の怪物「荒神（アラガミ）」によって荒廃し、彼らの「食べ残し」である人類は滅亡の危機に瀕していた。人類の対抗手段は、生化学企業「フェンリル」によって開発された生体武器「神機」とそれを操る「ゴッドイーター」だけだった。byウイキ

家族を失い、無気力を痛感した主人公シン・アスカは力を追い求め神機使いとなり極致化技術開発局「ブラッド」で様々な仲間と出会い、共に闘っていく内に、巨大な陰謀へと巻き込まれていく。

注意点

この作品はゴッドイーターの世界のシン・アスカです。そのため原作とは異なる点  
が多数見られると思います。

またゴッドイーターとガンダムSEED DESTINY のコラボが認められな  
い方およびキャラアンチの方はブラウザバックを推奨します。

これらを知った上でも大丈夫な方のみお進みください。

# 目次

プロローグ	怒れる瞳	1	
第一話	適合試験	出会いその1	4
第二話	戦闘訓練	出会いその2	9

## プロローグ～怒れる瞳～

この世界は、あらゆるものを捕喰する細胞「オラクル細胞」から形成される異形の怪物「荒神（アラガミ）」によって荒廃し、彼らの「食べ残し」である人類は滅亡の危機に瀕していた。人類の対抗手段は、生化学企業「フェンリル」によって開発された生体武器「神機」とそれを操る「ゴツドイーター」だけだった。

2年前

「シン、マユ急いで」

多くの人々がアラガミに怯え逃げ回っていた。俺たち家族もサテライト拠点を目指していた。

「ああ！マユの携帯」

逃げている途中、妹のマユが携帯を落としてしまった。

「そんなのはいいから！」

母さんがマユを呼び止めたが

「いやあー！」

マユは母さんを振り払おうとしていた。

「俺が取りに行くから安心してマユ。父さんと母さんは先に向かつて」

子供の頃から運動能力が高い俺はそう言って俺はマユの携帯を探しにいった。けどそれが悲劇の始まりだった：

携帯を見つけてマユたちの方角へ走っていったそのときマユ達の悲鳴が聞こえた

「きやああああ助けて！お兄ちゃああん！」

僕は全速力でマユたちのもとへ向かった

「マユうううう」

だが目の前の光景に僕はただ立ち尽くすしただけでできなかった

無惨にも食い散らかされている死体があったそれは父さんと母さんそして妹マユだった

自分のせいだ、自分が行かなければ母さんたちがこんな目にあわずにすんだのに

「父さん、母さん、マユ……うわああああああ」

僕はただ叫ぶことしかできなかった。

その後俺は、ゴッドイーターの人に保護されサテライト拠点に搬送された。そして俺は決意した自分がゴッドイーターとなりアラガミども駆逐することを心に誓った。マユたちの仇を取るために。

入隊前日、あの日助けてくれた神機使いと会い、入隊について相談をした。

「君はどうして、神機使いになるんだ？」

彼は俺に問いかけた。

「もう、誰も悲しい思いをさせたくないんです。力が無ければ何一つ、自分たちすら守れないと自分は思います。」

俺はそう返した

「そうか、ならば私から言えることは一つだ。力はただ力だ使い方を間違えれば大切なものを失う羽目になるそのことをしっかりと胸に刻み込んでおいてくれ。ではな私は任務に戻る。また相談事があったら連絡してくるといい」

そう言つて彼は席を立ち、任務に戻つていった。

そして、俺はフェンリルへ入隊をした。

ついに俺は神機使いとして生きていくことになった。どうやら俺は第三世代神機に適性があつたらしく

極致化技術開発局「ブラッド」の配属することになった

## 第一話く適合試験く出会いその1く

研究室の中に入った俺は台の上に乗せられていた。そこに横になっているとスピーカーから女の声が聞こえてきた。

『氣を楽になさい、あなたは既に選ばれてここにいます。今から貴方には対アラガミ討伐部隊「ゴッドイーター」の適合試験を受けていただきます。試験といっても、不安に思う必要はありませんよ、貴方はそう・・・「荒ぶる神」に選ばれしものですから』  
そして神機を手にし、腕輪はめられ頭上にあるドリルのような機械が現れて俺の右腕を突いた。

あまりの激痛で俺は叫んだ、その瞬間俺の体に何かが入り込んでくるようなそんな感じがした。

そして台から転がり落ちた。

しばらくすると痛みは消え、神機を使い体を起こした。

また女性の声が聞こえてきた。

『おめでとう・・・これで貴方は神を喰らうもの「ゴッドイーター」になりました。これから更なる「血の力」に目覚めることで極致化技術開発局「ブラッド」に配属されること

になります。・・・貴方には・・・期待していますよ』

そうさ俺はこれで神機使いになったんだ、あの日の無力な俺とは違う！俺があいつらをアラガミどもを殲滅してやる！

~~~~~

side ラケル

「適合失敗か？」

やや黄土色の髪色の青年が、金髪の女性に話しかけた。

「いいえ、よくご覧なさい。あの顔つき、あなたに洗礼を施したときとそっくり。」

女性はそう返した

「おめでとう・・・これで貴方は神を喰らうもの「ゴッドイーター」になりました。そして、これから更なる「血の力」に目覚めることで極致化技術開発局「ブラッド」に配属されることになります。・・・あなたのは・・・期待していますよ」

「シン・アスカか・・・彼には俺たちブラッドの未来を担う者になりそうだな」

青年は笑みを浮かべてつぶやいた。

「確かにそうですね。神機の適合率が貴方と同じ位の数値が出ていましたしね。」

モニターを閉じ、車いすを青年に向けて話しかけた

「では、ラケル博士、失礼します。」

青年は研究室を出て行った。

「シン・アスカ・・・貴方の眠っているもう一つの力も目覚めることを楽しみにしていますよ・・・」

~~~~~

side シン

「はあく適合試験でこんな疲れるとは思わなかったな」

自室のベッドに寝転がりながらつぶやいた。

「そーいや、休憩のあと戦闘訓練あったな、初日からハードすぎだな。でも俺はこの道を選んだんだなら進むしかない！」

俺は自室の扉を開けラウンジ向け歩いていった

「ここか？ラウンジって」

きよろきよろしていると

「シンさん初めまして、私はオペレーターのフランです。よろしくお願ひします。任務については私から受注するようにお願ひします。」

金髪の少女？に声をかけられた

「え？どうして俺の名前をしってん…知ってるんですか？」

「驚きのあまり敬語で返した。」

「当然です。このフライアの神機使いの方の情報は既に頭に入れてあります。」

「当たり前のように返された。」

「それはそうと、ブラッドの隊長に挨拶に行かれてはいかがですか？彼なら庭園におられると思いますよ」

と言った。

「挨拶ですか？、わかりました、では失礼します」

見渡す限り花が植えられてる。こんな艦隊に花が植えられてるって不思議に思っていると、奥の気に横たわっている一人の青年がいた。

「シン・アスカ、適合試験お疲れ様、まあ座るといい」

言われるがまま俺は腰を落とした。

「ここはフライアの中でも一番落ち着く場所なんだ」

青年は独りでに呟いた。俺は

「あなたがブラッド隊の隊長ですか？」

少し間があいてから彼は

「そうだ、自己紹介がまだだったな俺はジュリウス・ヴィスコンティ、君の言う通りブ

ラッド隊の隊長をつとめている。」

「ジュリウス……さんは俺と大して年齢変わりませんよねそれで隊長って……」

少し笑みをこぼして

「そこまで驚くことじゃない、シン・アスカ、それに俺のことはジュリウスと呼んでいい。そういえば君はこのあと演習が入ってるな、君の力……期待しているよ。」

そう言ってジュリウスは庭園を後にした。

## 第二話～戦闘訓練～出会いその2～

『それでは戦闘訓練を開始する、演習のためダミーアラガミをそつちに送るそれを殲滅してくれ』

とブラッド隊の隊長ことジュリウスはアナウンスで言った。

「味気ないな～こんなんでも本当に訓練になるんですか？」

ぶつきらぼうに俺は言葉を返す。俺は本物を早く狩りたいその気持ちでいっぱいだった。

『味気ない気持ちはわかるが、いきなりの実地訓練で命を落とされたら元の子も無いだろう。いいから訓練に集中しろシン』

あつさりと言葉を返されてシンも渋々

「はいはい、わかりましたよ。とにかく目の前の敵をぶつたせばいいんでしょ。」

俺は神機を構えダミーアラガミに向かっていった。

「うおおおおお」

俺は次々と現れてくるダミーアラガミを倒していた。やはりというか、ダミーのアラ

ガミだからか攻めても感触がいまいちな感じが伝わってくる。

『よし、次は難易度あげて中型のアラガミのダミーと戦ってもらおう。これはさつきよりは気を引き締めて戦ってくれ』

「でも、偽物には変わりませんよね。」

俺は調子に乗って返した

『そこまで言うなら、大型と中型、小型と同時に戦ってもらおうか』

冗談で言っているのか、マジで言っているか俺は戸惑った。ジュリウスは常に冷静で真面目なこんなこと言うのはあり得ないと思った。とつさに俺は

「え？ 冗談ですよ。隊長……」

冷や汗が流れ、寒気がシンを襲った

『俺が冗談を言う人間だと思おうかシン？』

これマジだ……マジで言ってるよと俺は心の底で思った。

「くっそーやっつてやるこんちくしょー……」

俺はもうただ神機をふり続けた。そして考えることをやめた。

シンは考えるのをやめた。

sideジュリウス

モニターを見つめながらシンの戦闘ぶりを観戦をしていたジュリウスは

(やはりシン・アスカ、性格には難があるが、彼の戦闘能力には目を見張る者があるな、この調子なら実地訓練も早くできそうだな。)

「あらジュリウスずいぶん嬉しそうね。」

ラケル博士が部屋に入ってきた

「ラケル博士」

敬礼をしてことばをはく

「シン・アスカの戦闘訓練です。彼はとてつもない戦闘能力をもっています。ブラッドのエースになる日も遠くはないでしょう。」

「それはいいことだわ、ジュリウス。」

慈愛に満ちた笑みを浮かべラケル博士は部屋を後にした・・・

sideシン

演習を終え、くたびれたシンはジュースを片手に歩き飲みしながらロビーを見ると大きな袋を漁っておでん挟んだパンをむしやむしや食べている女の子がいた。シンの視線に気づいたららしく隣に座るようにソファをたたいた

「お疲れ様ー、君もブラッドの新生生・・・じゃなくて、新入りの人だよね？」

猫のような髪型の女の子に話しかけられた。

「そうだよ、俺はシン・アスカ。君も新入りなのか？」

自己紹介してシンも誰かと聞き返す。

「うん、そうだよ。私はナナ。君と同じくブラッドの新入りです。よろしくねー」

笑顔で返し、手に持っているパンをむしやむしやと食べ始める

「君も訓練受けたんだろ？ どうだったんだ？」

俺は何となく聞いてみてみた

「うーん、いまいちだったかなあ・・・君はどうだった？」

小首をかしげシンに返した

「最初は順調だったんだけど・・・隊長に無理難題なことさせられたあげくでかいダミーアラガミ2体同時に戦わせられるわけで、意味が分かんねえよ。俺初日なんだけど・・・」  
初対面の人に俺何言ってるんだろと心のなかで思っていたがつい口に出してしまった。

「そ、それは災難だったね。あーそうだ！これあげるね」

でかい袋からおでんを挟んだパンを取り出しシンに突き出した

「はい、どうぞ。お母さん直伝！ ナナ特製のおでんパン！ すっごくおいしいし、元気なれるから食べてよー」

半ば強引に渡され戸惑うシン

「おっと、私そろそろ訓練の時間だから行ってきまーす」

とたとたと走っていき階段のあがったところで

「残したらあとで怒るからねー」

と一言念押しして訓練を受けにいった。ひとりソファーに座りおでんパンを持っていったシンは

「これ、どうしよう?」

おでんパンの処理に困っていた・・・

捨てることもできず腹をくくりかじってみた

「これ意外といけるな」

シンはおでんパンを食べ終わりひとときの休憩を取るのだった・・・